

『テレビに映らない世界を知る方法』

太田昌国著、現代書館、2013年、2300円＋税

天野 恵一

改めて、キチンと読み直してみようと思いついて、鶴見俊輔の『日常的思想の可能性』（筑摩書房・1967年）を読み出し、そこに収められている、1955年に発表された「かるたの話」の中に、以下のようなくだりを発見して、私は少し驚いた。「戦争が終つて」との書き出しのところに、こういう文章が続いている。

「新しく、平和憲法という嘘が公布された。これはアメリカに強制されて、日本人が自由意思で作つたように見せかけたもので、紛れもなく嘘である。発布当時嘘だったと同じく、今も嘘である。しかし、この嘘から誠を出したいという運動を、私たちは支持する。それは、嘘から誠を出し得るという前提に立っている。

／歴史の緩慢な流れの中で行われる、ゆるゆるとした嘘から誠への変質。歴史の激しい変化に際し



て投げかけられる嘘の、誠への急速な変質。それらのことに、誠実派は否定的に首を曲げやすいのだが、最も誠実な表現をとるとすれば、歴史の中で私たちが持ち得る誠は、ひどい嘘をときほごしてあきまいという決意にすぎず、ここで達しうる誠は、嘘をときほごしていくという仕方ではか近づき得ない。嘘を拒否する立場は歴史の流れに身を投じないという立場であろう。私たちの言葉は、刻々に、歴史の中で嘘となり、その中で誠実でありたいと思うが、その方法は、刻々あるいは長い間ためておいては、嘘を人にあやまるという方法によるしかない。友人というのは、そういう方法をとることを約束した者の集団だと思ふ。」（傍線引用者）

「九条の会」という最後の最大の「護憲」団体の旗振り役をつとめ続けている鶴見は「護憲」論の嘘に、十二分に自覚的に、戦後の時間をスタートしており、「嘘」をときほごし「誠」に近づける運動として戦後の保守政権の改進黨動に反対し続けてきたのだ。

私が、憲法問題を考えた時（60年代）は、歴史的起源の「嘘」に、すでに「持たない」と宣言しておきながら軍隊（基地）を持ち、米軍のベトナム侵略に加担している実態を無視する「嘘」がかさねられている状況であり、私はその「嘘」を原則的に拒否しようという姿勢で、反戦運動に深入りしていった。「嘘」がうみだした「誠」（真実）を、嘘をときほごしながら「誠」の方へ、できるだけ転換させていくという方法が、自分のものになったのは（誤りと自覚し、そちらへ転換したのは）1990年代（後半）、アメリカの侵略上占領に加担するかたちで、日本が本格的に派兵国家化していく時代（九条平和主義が圧倒的に少数派に追い込まれていく時間）のまった

だ中においてであった。

これから紹介する『テレビに映らない世界を知る方法』（現代書館）の著者、太田昌国は、私同様、「原則的に嘘を拒否する」という立場（方法）で反戦運動にコミットしだし、ほぼ同じ時間に、鶴見のいう「嘘をときほごし続ける」という立場（方法）に転換したはずである。

この本は、その太田の「二〇〇一年に起きた『9・11』事件以後の規定性の中で――すなわち、米国が主導する『反テロ戦争』なる理不尽な暴力を阻止できないままに形成されていた時期」（はじめに）に、その状況に抗して書かれた大量の（新しい文章から時期的に過去に遡るかたちで集められた）短文の集積である。通読して実感するのは、過去の植民地支配とそれの戦後の継続を問う、過去と現在を重ねて未来への責任を問う鋭い植民地支配責任論の批判（原理）が、個々の具体的戦争状況批判の短文を通して、生き生きと貫徹しているという事実である。それは（ドグマ）としてではなく、生きた思想原理として個別具体的な短い時評に媒介されることによつて、より説得的なものとして提示されている。そして、植民地支配責任論の視野は日本帝国主義とアジアという狭い枠を超えて、欧米帝国主義批判を通して必然的にグローバル（世界大）に拡大され時間的には近代以前に、遡及する。歴史の流れに身を投じながら「とんでもなくひどい嘘をときほごしていく」批判（方法）原理としての有効性（普遍性）がそこには十分に示されているのだ。

この間、長く教えられ、励まされ続けてきた、運動上の私の年長の「友人」の力作である。ぜひ、あなたも一読を。

（あまの・やすかず／本誌編集委員）